

柔道選手の体格と勝敗

—全日本柔道選手権大会の場合—

（指導 平田欽逸教授）

鈴 木 輝 雄

は じ め に

幾多の運動選手についての生理的、力学的、または発育発達に関する研究が数多くなされているが、筆者等は、数年来柔道選手の体格判定を行ない、それに基づいて柔道選手の体格と勝敗と技との関連について調査研究をしてきた。

今回は、全日本柔道選手権大会参加選手について調査追究することができたので報告する。

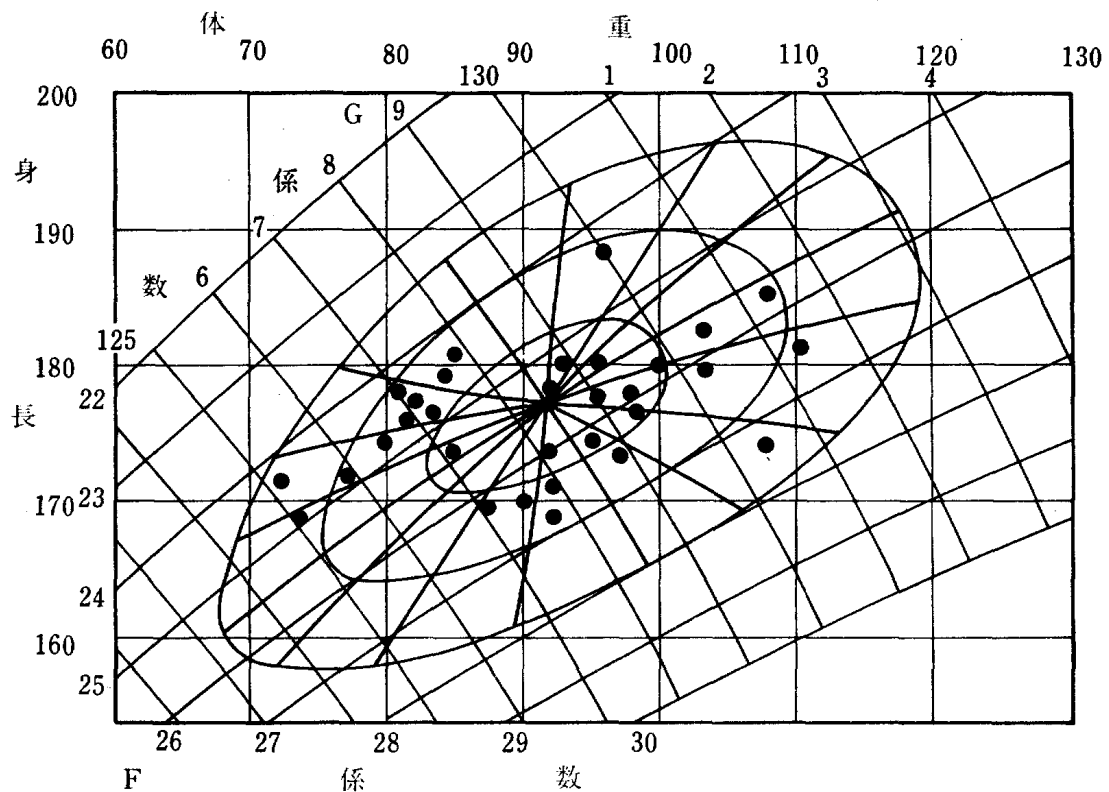
1. 調査資料および研究方法

調査対象は、昭和45年度全日本柔道選手権大会に参加した32名の選手で、昭和45年5月22日と5月30日付の朝日新聞に発表された資料にもとづいた。

研究方法として、参加選手の年令、身長、体重、段位、出場回数、勝率、きまり技等を資料として、まず32名による体格判定図を作成し—第1図—、その体格判定に基づいて、極座標式体格把握を行なった。

次に、極座標によって、敗者に対する勝者の体格を分類し、年令別、段位的、出場回数別、試合内容的等の区分考察をした。

さらに、既に若干得た高校柔道選手の体格等の知見を加えて考察を進めた。



第1図 全日本柔道大会（昭45）の出場選手の体格判定

2. 調査研究成績

1 体格判定

a. 体格の概要

体格の概要を第1表でみると、身長は約半数（47%）の選手が175～179 cmを占め、最大身長、二宮選手の 189cm、最低身長、池田選手の 169cm、その差20cm、平均身長176.5cmである。

体重は、90～99kgの選手が約半数（47%）で、最も重い篠巻選手が 110 kg、最も軽い湊谷選手が73kgであり、その差37kg、平均体重90.8kgである。

また、G係数の最大は131.3、最小は125.1、平均は 128.2である。F係数は最大27.3、最小は24.2で、平均25.5である。G係数の最大は篠巻選手、

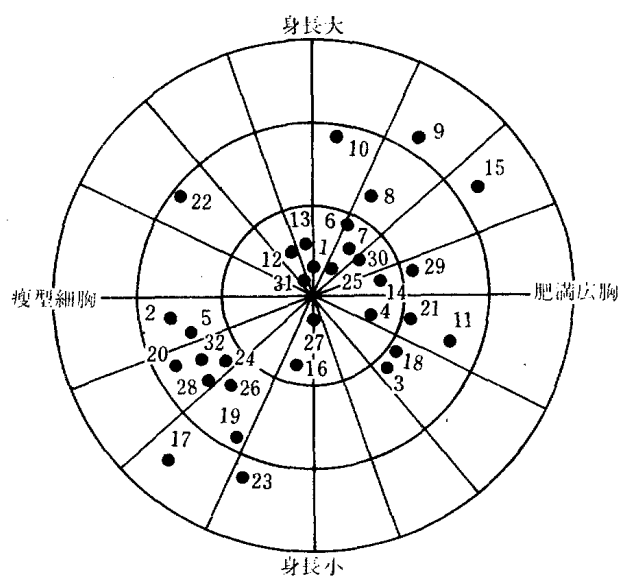
最小は池田選手になる。F係数では、最大が前島選手，最小は青井選手となる。

第1表 各測定値の分布表

身長		G 係数		体重		F 係数	
165~169	1	125,0~125,9	3	70~79	3	24,0~24,9	11
170~174	9	126,0~126,9	3	80~89	9	25,0~25,9	10
175~179	15	127,0~127,9	8	90~99	15	26,0~26,9	10
180~184	5	128,0~128,9	8	100~109	4	27,0~27,9	1
185~189	2	129,0~129,9	5	110~119	1		
		130,0~130,9	3				
		131,0~131,9	2				
平均	176,5	128,2		90,8		25,5	
最大	189	131,3		110		27,3	
最小	169	125,1		73		24,2	

b. 各選手の体格

選手それぞれの体格をみたものが第2図である。総体的に、体格傾向的にみると、大きくて肥えている選手と小さくて痩せている選手が折半の割合で70%を占めている。残り30%が小さくて肥えているか、大きくて痩せている選手になるわけであるが、殆んどは小さ



第2図 出場者の体格

第2表 体育判定一覧表

番号	氏名	判定	番号	氏名	判定
1	近谷 忠行	中	17	湊谷 弘	小 瘦
2	小野沢 弘文	稍 瘦	18	金子 啓介	中
3	佐藤 幸三	稍小肥	19	丸木 英二	稍小瘦
4	千葉 翠	中	20	青井 聳	小 瘦
5	佐藤 宣踐	稍 瘦	21	河野 正治	稍 肥
6	小谷 利夫	中	22	二宮 和弘	大 瘦
7	森田 祥幸	中	23	池田 光輝	小
8	加藤 雅晴	稍 大	24	西野 和弘	稍小瘦
9	篠卷 政利	大 肥	25	小林 和紀	中
10	西村 昌樹	稍 大	26	原野 広信	稍小瘦
11	岩田 久和	稍 肥	27	国重 敏明	中
12	河原 月夫	中	28	国重 健治	稍小瘦
13	安齊 奏人	中	29	古賀 武	稍 肥
14	山元 俊隆	中	30	上野 武則	中
15	前島 延行	大 肥	31	堀口 憲一	中
16	大久保 健市	中	32	園田 勇	稍小瘦

くて肥えている選手である。

第2表は、(第1図)に基づいて5分類し、一覧表にしたものである。(第2図中の数字は第2表の番号をしめす。)

参加選手32名の相対的体格は、身長最高の二宮選手(No.22)は大療、身長最低の池田選手(No.23)は小瘦となる。最重量の篠巻選手(No.9)は大肥、最軽量湊谷選手(No.17)は小瘦となる。G係数最大と最小は篠巻、池田選手にあたるが、F係数最大前島選手(No.15)、最小の青井選手(No.20)は、対照的な位置にあり、大瘦と小瘦である。また、後述するがこの対象的体格の両選手が1回戦に取組み、小瘦が大肥を破ることになる。

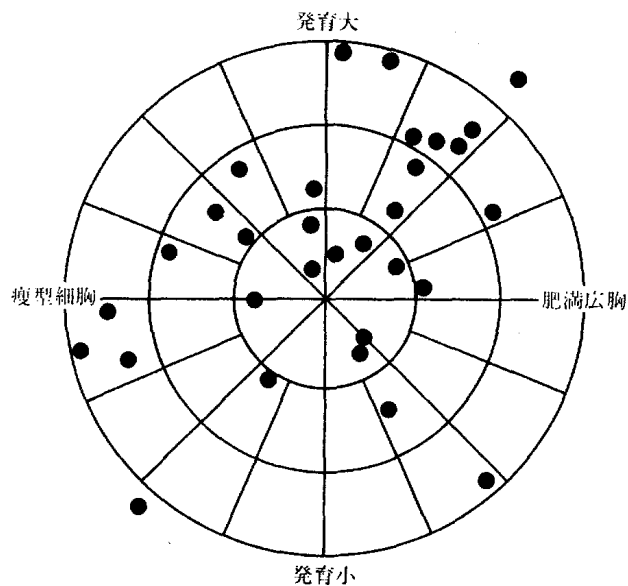
2 体格と勝敗

a. 勝者の体格の概況

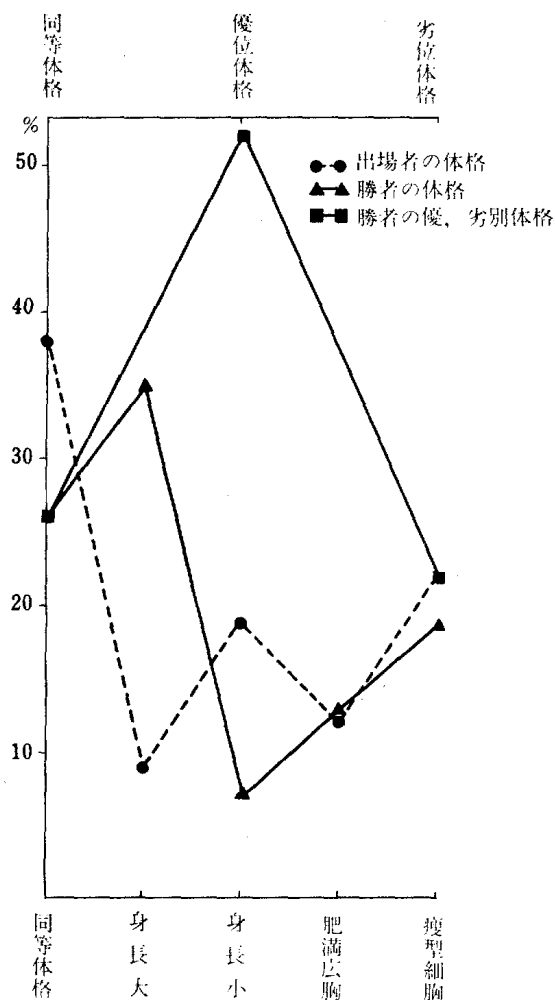
第3図に本大会の全勝者31名をしめす。その勝者の体格を5分類し、他と比較考究するものが第4図になる。

勝者の体格で、分類上最も多いのは、身長大が35%となっている。それは勝者のうち半以上が背が高い選手が勝つことをしめしている。ついで同等体格(背丈肉付が敗者と大差ない)が約25%、敗者より痩せている勝者が約20%、敗者より肥えている勝者が約10%、敗者より小瘦の勝者が約6%となる。

また、敗者に対して優位体格(大きい、肥えている)、劣位体格(小さい、痩せている)かで比較すると、優位体格が約52%、劣位体格は約21%である。つまり敗者より、よい体格の者が勝つのは、わるい体格の者が勝つのに2倍半にあたる。これは比率的に若干異なるが、傾向的には高校



第3図 勝者の体格



第4図 体格別勝者の割合

柔道選手の場合と同じである。

b. 年齢と体格

年齢構成は、20才から32才までにわたり、その平均24.9才である。23才の選手が最も多く（22%）、ついで26才（19%）になる。年齢差は12才、30才以上は3人になる。

（第2図）にもとづいて、体格別平均年齢を調べると、中等体格24.9才、身長大25.7才、肥満25.8才、身長小24.3才、瘦型24.3才となった。

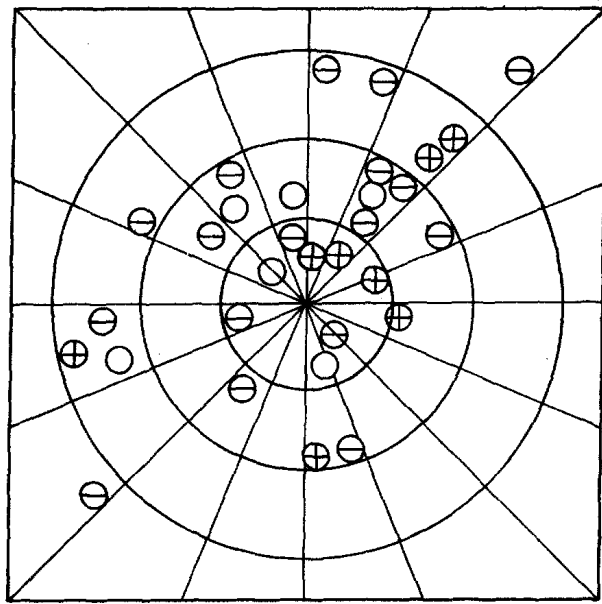
つぎに、2回戦進出選手の平均年齢は24.9才、3回戦は23.5才、4回戦22.3才、

決勝戦は21.5才となり、決勝戦へと向って、選手は若くなっている。

敗者に対して、年少者が勝者となる55%（17人）、同年令19%（6人）、高年令者が勝者となる26%（8人）

また、敗者に対して年齢と体格との関連をみると、第5図にしめすようになる。身長の大・小の割合は、年齢が低、同、高3者とも65：35で、何れも身長の大なる者が勝者となることが多い。肥瘦においては、年少者は53：47、同年令33：67、高年令87：13となる。年少勝者は、肥瘦ほぼ同じであるが、同年令勝者は痩せていることが多く、高年令勝者は肥えている。

c. 段位と勝敗と体格



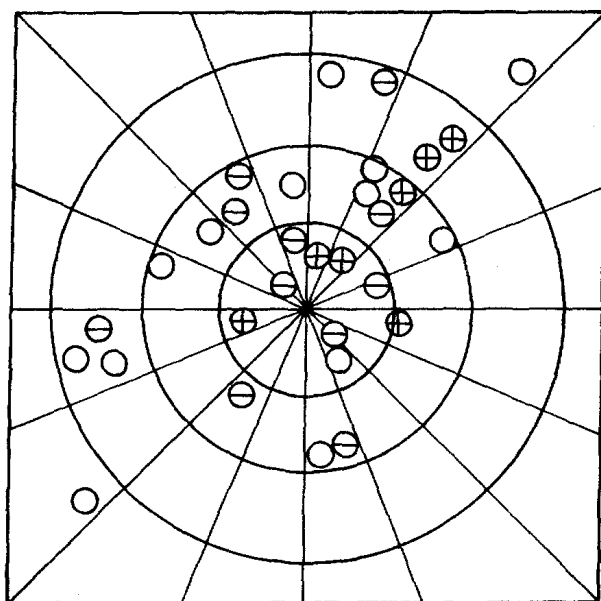
⊕ 高年令 ○ 同年令 ⊖ 低年令
第5図 年令高低別勝者の体格

2段から6段まで、平均段位 4.4段、最多数は5段の15人 (47%), ついで4段の10人 (31%) で、3段4人 (12%), 6段2人 (6%), 2段1人 (4%) の順となる。

上段位の選手が勝つのは8人 (26%), 同段位13人 (42%), 下段位勝者10人 (32%) となる。段位の巾がせ

まく、5段が約半数を占めているから組合せ上同段位が多くなるのは当然であるが、段位の上・下の比較において、下段位の勝者が上位の段の勝者によりわずかではあるが多い。第6図参照。

つぎに、上段位勝者の体格は大小の割合が75:25, 肥瘦は87:13となった。同段位では大小が62:38, 肥瘦は54:46, 段位が低くくて勝っているのは大小の割合が60:40, 肥瘦は40:60となった。



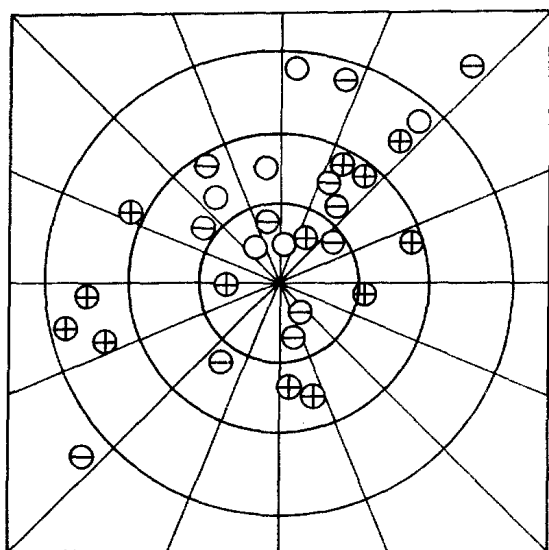
⊕ 上段位 ○ 同段位 ⊖ 下段位
第6図 段位上下別勝者の体格

d. 出場回数と勝敗と体格

初出場13人 (40%), 9回目1人で、平均出場回数2.5回, 初出場と2回目以上の比率は2:3になる。

出場回数の勝者13人 (42%), 同回数6人 (19%), 出場少回数勝者12人 (39%) である。第7図参照。

出場回数多寡別勝者の体



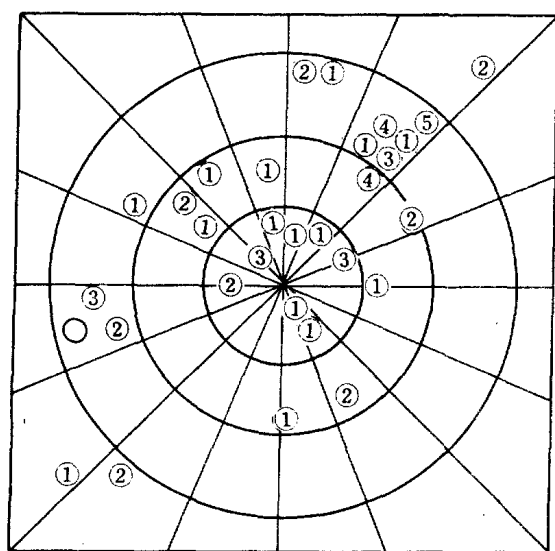
⊕ 出場回数多 ○ 出場回数同 ⊖ 出場回数少
第7図 出場回数多寡別勝者の体格

格をみると、出場多回数の勝者の大小の割合は54：46，肥瘦は62：38となる。同回数の勝者では大小が100：0，肥瘦は50：50である。出場少回数勝者の大小は67：33，肥瘦は58：42であった。

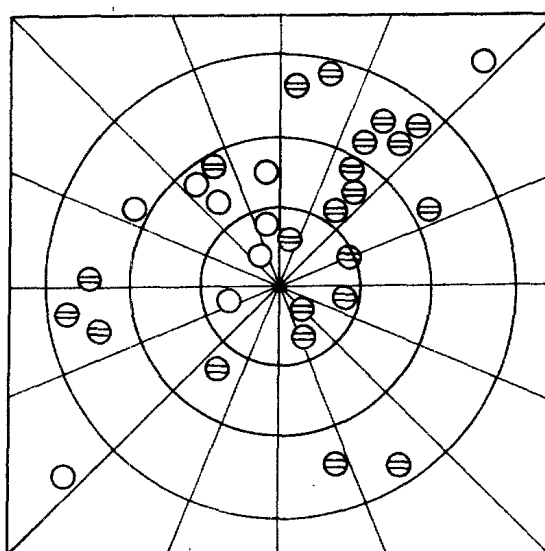
e. 試合内容と体格

試合内容に関して第8図，第9図にしめす。

1本勝が9本（29%），優



① 1回戦 ② 2回戦 ③ 3回戦 ④ 準決勝
⑤ 決勝
第8図 各回戦別の勝者の体格



○ 一本勝 ⊖ 優勢勝
第9図 勝者の体格

勢勝が22本（71%）となり，1本勝のうち，投技7本（80%），固技2本（20%）である。

上位戦進出別（第8図）に大小，肥瘦についてみると，大小は1回戦の勝者から3回戦の勝者まで，およそ70：30であるが，準決勝，決勝の勝者は，全勝者とも敗者より大である。肥瘦においても，およそ50：50であったのが準決勝，決勝は全勝者が敗者より肥えている。

また、1本勝における大小の割合は80：20、肥瘦は10：90である。優勢勝では大小は60：40、肥瘦は80：20である。

傾向として、1本勝では、大きくて痩せている選手が勝ち、優勢勝では大きくて肥えている選手が勝っていることになる。

3. 総 括 お よ び 考 按

1. 昭和45年度全日本柔道選手権大会に参加した32名の選手の平均年令は24.9才で、東京オリンピックに参加した日本選手 356名の平均年令と全く同じである。

優勝した篠巻選手は23才で、遂年本大会の優勝者の歳が若くなる傾向にあるが、平均年令に対して若いことが勝機をつかむ1つであることもいえる。

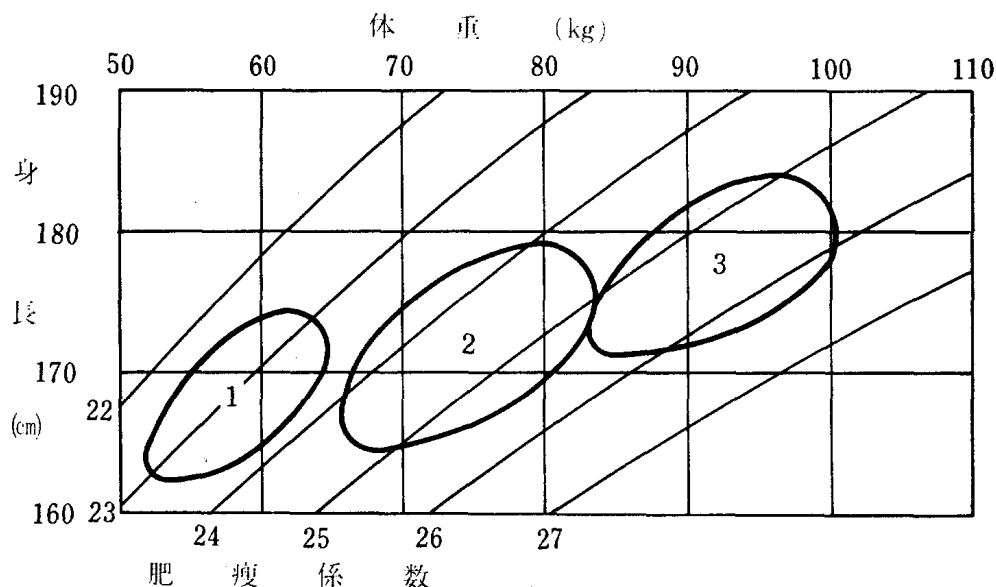
敗者に対して、年少者が勝者になるのは、高年令の勝者に対して2倍強であるのが本大会の成績であり、体格的にいえば、年少者が勝つには肥瘦は大した関係はなく、大きいことが条件になる。また、高年者は大きくて肥えていることが大事な条件となる。

2. 段位においては、上段位者が勝者となるのと、下段位者が勝者となるのとの差はわずかで、段位が勝敗を左右する大きな要素とはなっていない。しかし体格的にいえば、上段位の者が勝者になるには大きくて肥えていることが必要である。

3. 出場回数の多寡については、出場多数勝者と出場回数少数勝者とは13人：12人で優劣つけがたい。体格的にも、その要件となるものは見当らない。

4. 7割までが僅差を含む優勢勝で、従っていわゆるきまり技で勝負がついたのは3割である。普段顔を合わせ、ともに練習し、また相手の技は勿論すべてについて研究し合っている選手同士では、いかに試合の進め方が苦しいかを物語っている。

体格的にみると、1本勝の勝者は痩せてはいるが大きい。優勢勝の勝者は肥えていて大きい。大まかではあるが、体格について俗な表現をすれば、大きい選手はその大きさに、小さい選手は技で勝っているのは、高校選手の場合とほぼ同じ傾向である。



第10図 体格判定図 1. 全国高三男(昭42) 2. 全国高校柔道大会(昭44) 3. 全日本(昭45)

5. (A)高校柔道選手と体格を比較した体格判定図を第10図にしめす。17才の標準体格に比較して、全国高校柔道大会参加選手は数段優れた体格をしている。さらに全日本の選手はまた数段大きいことがわかった。それがただ大きいことだけではなしに、いずれも一般に比較して発育大肥満広胸の体格で、曾って筆者等が唱えた柔道体格が殆んであることがわかった。理想的健康体格＝柔道体格＝長寿体格＝活動性体格の持主が多い。

(B)勝者となるには、総じて大きくて肥えていることがその要件である。然し、年令別、段位別、出場回数別、または試合の内容別に考察すると、逆に小さくて痩せていることが有利であることも見出された。結局ここに柔道の真髓があるわけで、身体的に、精神的に、科学的トレーニングの必要性を痛感した。

お　　わ　　り　　に

昭和45年度全日本柔道選手権大会参加選手の体格判定を行ない、それに基づいて、諸条件のもとに、分類、比較、考究を試みた。凡そ柔道一般としての知見を増すことができたが、人数的にも資料がわずかであったから、向後、全日本選手権大会についても数年以上の、また他の資料も豊富に加えて完成を図りたい。